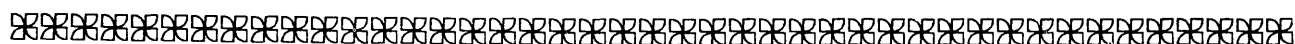


臥龍が丘は緑なり

松高同窓会東京支部会報

平成6年度(第37回)支部大会号 6.4





第37回東京支部大会プログラム

平成6年6月4日(土) 午後3時

於・池之端文化センター

準 備

場内指令(段取, 渉外)	伊藤 勇五	鶴巻 浩	大橋 貞夫
案 内(総合)	沢出 赳允	小林 早月	深見 洋子
受 付(総合, 来賓)	斉藤 和男	岡本 和子	鈴木 節子
(旧中, 旧女)	堀 哲二	佐藤 玲子	高久 貞夫
(高校男子)	青木 猛	松田 茂夫	笠原 静夫
(高校女子)	山西愈佐子	真水 道子	山下由紀子
(景品受付)	渡辺 八郎	大江 佳一	佐久間英輔
(会報記念品配布)	関 孝世	石黒 四郎	寺山 征子
	渡辺 厚子	田淵みやの	八木又一郎
会 場(設営)	鈴木多喜男	広田 達衛	田代 信雄
	今井 正	築取 錦二	
司 会(進行)	塚田 勝	木村 孝子	片柳 ムツ
開会宣言			沢出 赳允

第一部

平成5年度経過及び会計報告(新会則)	事務局長	中村 倉吉
会計監査報告	監事	芳賀 健一
支部長挨拶	支部長	佐伯 益一
来賓挨拶	同窓会長	茂野 敏郎
	校長	徳橋 時男
来賓紹介		伊藤 勇五
合 唱	文部省唱歌「ふるさと」	全 員
		女子役員リード

第二部

懇親会・乾杯音頭	出席者高齢者の中から
アトラクション	北区新潟県人会おけさ会の皆さん
ジャンケンゲーム『佐伯賞』	沢出 赳允
抽選会	篠川 恒夫
	真水 道子
	石黒 四郎
	佐久間英輔
校歌・応援歌	全員
手 締 め	支部長
万 歳 三 唱	校長
閉会挨拶	伊藤 勇五
歓 送	会場出口にて役員全員
写真・インタビュー	武藤 三郎 広報部員

☆ ☆

(表紙写真について)

村松町, 住吉神社の高砂人形 説明は本文中にあります。

(村松町役場写真クラブ撮影)



ご挨拶に代えて

—— 会則制定について ——

同窓会の会則などというものは有っても無きが如き存在であると思う。然し無ければ万が一の時に困るであろう。現に東京支部では、過去何十年の間、会則なしで運営されて来て、何等差支えも痛痒も感じていなかった。

「万が一。」が無かったからである、どこの会則を見ても目的とする処は皆おなじようなもので「親睦を図り、母校の発展に寄与云々」の一行で終っており飲食を共にし愉快に談ずべしなどとは書いてない。この「親睦」が、いろいろな意味を持っており、解釈の範囲も広い、私が支部長になって、昭和62年以来、皆さんから会費と寄付を頂くようになった。こゝに謂う会費とは、会の、あるいは支部の運営のための経常経費であって、最底限の負担は必要と思う。会費を納めて頂く以上、その収支について報告するのは当然の義務であり、又、役員の責任、任務、任期等についても予め定めておかねばならない。

「ごあいさつ」

—— 被服科の閉科と今後の展望 ——

桜便りやウグイスの鳴き声が話題となる良い季節の訪れと共に村松高校は今年度から普通科単科の高校となり、新しい時代を迎えることになりました。さて、主な行事として、

- 平成6年1月22日(土) 被服科閉科記念式典挙行。記念事業として、記念誌発行、卒業制作展開催、記念碑「ときわの志操」建立、別れの宴。
- 平成6年3月4日(金) 第46回卒業証書授与式挙行。卒業生は、普通科225人、被服科26人。大学・短大進学者23人(大学5人中国立大1人、短大18人中県立短大1人)、専修・各種学校等進学者59人、就職者等169人。
- 平成6年4月8日(金) 入学式挙行。普通科男子120人、女子131人入学。

昭和25年に設置された被服科が約半世紀を閲して閉科に至りましたことは、誠に残念なことでした。当日、同窓生代表近藤つね子(被服科25回卒)氏及び卒業生代表瀬倉由香里さんの惜別の言葉は、寂しさの中にも凜とした響があり、参列者の心を打ちました。別れの宴では、旧職員川崎修先生から往時の生徒を彷彿とさせる思い出話があり、多くの方々と名残りを惜しみ合いました。

この一連の行事には、茂野敏郎同窓会長、貝瀬弘副会長各位の格別のご芳情を賜りました。誠に有難く、深く感謝致しております。

東京支部長 佐伯 益一



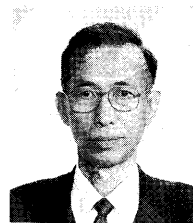
従って、会則は今後の為にも是非必要であると考えたわけである。

会則の制定については数年前から懸案となっていたが、昨年の支部大会で発議し、以後数回の検討会を経て、この度、原案をお示しすることが出来た。条文は出来るだけ簡略したつもりであったが、結局は、ありふれたものになった。同窓会は皆さんの善意の団体であるから東京支部では会費の納入については、年一回、年度始めにお願いするだけで、決して強制や督促はしない建前になっている。

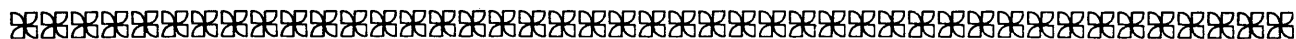
御理解願いたいと思う。

昨年来、多くの先輩、友人が死去されている。誠に悲しいかぎりではあるが、謹んでご冥福を祈ると共に、同窓各位の今後益々の御健勝、御活躍を願い、簡単ではあるが、ご挨拶に代える。

校長 徳橋 時男



ところで、普通科18学級の松高の今後の在り様として、基礎学力の充実と学力の増進、社会性の涵養、部活動の奨励等を一層図り、生徒諸君が可能性の幅を広げ、より良い自己実現が図られるよう指導して参りたいと考えております。幸い部活動では、陸上部の活躍が目覚しく、県10傑として5千M、1万Mの2種目に名を連ねる生徒が出たり、理科同好会は、大沢鐘乳洞の研究により2年連続読売学生科学賞優秀賞を受賞したりしております。また、同窓会長氏を会長に仰ぐ後援会も充実し、進学指導・部活動に援助をいただいております。更に、在町同窓会役員各位のご尽力により教育懇談会が設けられ、松高の活性化を図るべく地元中学校関係者から松高へのご理解とご協力を願って懇談を深め、既に5回を重ねるに至っております。今や特色ある学校づくりと生徒の多様な希望の実現を図るために大きな変革が要請される時代であり、同窓各位から賜る多大なご支援を価値あるものとしていかねばならないと考えております。東京支部の方々が、万感の思いを込めて大合唱される「故郷」を拝聴する度に、高校時代が楽しく有意義で、思い出深く回想されるような学校作りに励みたいと考えております。益々のご鞭撻を賜りますようお願い申し上げますと共に、東京支部の更なるご発展を祈念申し上げます、ご挨拶と致します。



ありがとうございました。

平成 5 年度収支決算書

平成 5 年 4 月 1 日～平成 6 年 3 月 31 日

新潟県立村松高等学校同窓会東京支部

平成 5 年度会費納入者（其の二、敬称略）

関 建世，田川百合子，渡辺ミツ

（3月31日現在，以上合計 247 名 741,000 円）

◎同寄付金納入者（其の二、敬称略）

7,000 円 田川百合子

6,000 円 中村市雅一郎

（以上合計 延 89 名，270,000 円）

平成 5 年度 東京支部の動き

平成 5 年

4 月 3 日 会報15号編集会議，於ツルマキ出席 8 名

4 月 17 日 赤山会春季例会，於市ヶ谷私学会館出席 30 名

5 月 15 日 幹事会，於エース高輪，出席 29 名支部大会
案内状発送作業，作業後懇親会

5 月 18 日 印刷所へ会報15号原稿送付

6 月 4 日 同上初校受領

6 月 5 日 広報部会報校正会議，於ツルマキ，出席 5
名，終了後，池之端文化会館で大会打合せ

6 月 7 日 印刷所へ初校原稿送付

6 月 21 日 会報再校

6 月 30 日 会報15号印刷完了，納入

7 月 3 日 東京支部大会，於池之端文化会館
出席 122 名，来賓 6 名

この前後各一週間夫々準備作業および後整理

7 月 17 日 幹事会，於エース高輪，出席 24 名，会報15号
発送作業，支部大会反省並びに慰労会
新潟県立安塚高校東京同窓会に表敬出席
佐伯，鈴木，鶴巻

8 月 17 日 母校同窓会本部総会および懇親会，於明月^{めいげつ}
支部より出席 5 名

9 月 4 日 会報16号編集会議，於ツルマキ
出席 6 名，会則原案審議

9 月 16 日 伊藤勇五氏，夫人千恵子さん（旧高女26回卒）
通夜，於中目黒，正覚寺，17 日告別式，支部
より献花

参列者，佐伯支部長，中村事務局長，齊藤，
鈴木，沢出，大橋，鶴巻，岡本，小林，佐藤，
鈴木（節）深見の各幹事と同級の一氏，佐野，
新保の各氏ら計15名（敬称略）

9 月 18 日 赤山会秋季例会および見方，千代両氏の喜寿
祝い，於市ヶ谷私学会館出席 17 名

収 入 の 部		支 出 の 部	
項 目	金 額	項 目	金 額
平成 5 年度会費	741,000	振 込 手 数 料	11,910
男子 174 女子 73		会 議 費	245,217
計 247 名		外 注 印 刷 費	373,000
寄 付 金	270,000	送 料 通 信 費	129,432
男女延 計 89 名		支 部 大 会 費	959,619
支 部 大 会 会 費	1,030,000	慶 弔 費	81,000
男子 9 千円 88 名		慶 事 2 弔 事 2	
女子 7 千円 34 名		本部総会参加費	50,000
支部大会祝儀 3 件	50,000	雑 費	35,137
預 金 利 息	791		
雑 収 入	6,600		
小 計	2,098,391	小 計	1,885,315
前 期 繰 越 金	142,583	次 期 繰 越 金	355,659
計	2,240,974	計	2,240,974

次期繰越金内訳

高輪郵便局（No.58 振込まで）	174,234
芝信用金庫	52,993
手持ち現金	128,432
計	355,659

上記のとおり報告いたします

平成 6 年 4 月 5 日 事務局 中村 倉吉 ㊞

経 理 岡本 和子 ㊞

監査報告書

上記の収支決算書は監査の結果，適正であることを認めます
平成 6 年 4 月 10 日 監 事 芳賀 健一 ㊞

10月23日 幹事会，於新潟県人会館，出席 17 名，会則審
議他，新幹事に高久貞夫さん（中 34）

10月30日 会報16号編集会議，於ツルマキ出席 4 名

11月 1 日 印刷所へ会報16号原稿送付

11月16日 同上初校受領

11月17日 会報校正会議，於ツルマキ 2 名

11月18日 印刷所へ初校原稿送付

12月 3 日 前赤山会々長川瀬五郎氏（中11回卒）通夜，
於目黒区，円融寺，4 日，告別式，支部より献花
参列者，佐伯支部長，中村事務局長，渡辺文
男，亀嶋謙（元，現赤山会々長，小田怒哉，
市川薫平，柴沢啓一，松三長四郎，山口三郎，
堀 哲二，武藤三郎の各氏 11 名

12月 9 日 会報16号印刷完了，納入

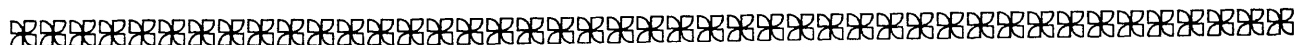
12月18日 幹事会，於新潟県人会館，出席 26 名，会報発
送作業，終了後，望年会，新幹事に武藤三郎
さん（中26）

平成 6 年

2 月 12 日 会報17号編集会議，於等々力“江戸清”，出席
7 名，この日，前夜より大雪なり

2 月 26 日 幹事会，於新潟県人会々館，出席 22 名，経過，
現況，会計報告，支部大会記念品等に付協議，
終了後新年会

3 月 19 日 会報17号編集会議，於ツルマキ出席 4 名



クラス会便り (其の一)

◎ 村松高女 23 回 “花すみれ会”

昨平成 5 年 10 月 18 日、越後湯沢温泉の“ホテル双葉”に於て同級会を開催しました。新潟勢と東京勢の出会いの場に丁度よいということで此処になりました。昭和 20 年（終戦の年）3 月のことで、女学生は女子挺身隊として働いておりました片倉製糸工場の職場で卒業証書が操業中の機械の上にポンポンと置かれていただけでした。あれから 40 余年の歳月が経ち、相会した 16 名の頭には白いものが目立ち、御出席くださった藤井先生は 83 才とはとても思えぬ羨ましいほどのお若さ、お元気さでした。近況を語り、往時を偲んで夜の更けるのを忘れたのでした。翌日はホテルの裏からロープウェーで登った先のアルプの里を散策しながらの



語らいに時を過し、今回は今年の 5 月 21 日、新潟市内で会することを約束して散会しました。

なお、今秋 11 月 22 日から 27 日まで同級の書家「中野松葉」さんの「越後の美」書展が東京銀座三越 8 階ギャラリーで開催されます。同窓の皆様のお出でをお待ちしております。（写真前列中央は恩師の藤井ミツ先生。

（旧高女 23 回卒、大橋 也子）

◎ 高 4 回 卒業生還暦を迎える

鈴木健司

平成 5 年は、第 4 回卒業生（昭和 27 年卒業）のうち、昭和 8 年誕生れの人達が還暦」とは、ついこの間まで、遠い将来の現象であり、自分のことではなく、他人様に関することで、大層な老人になることと考えられていました……。

それが、自分達の身の上に実現してみると、改めて、人生の大きな転換点だと気がつきます。職業面で、大多数のサラリーマンが、定年を迎えることになります。健康面では、いろいろな変化を実感する年齢になっています。家庭内では、世代交替が着実に進んでいます。

還暦を機会に、第 4 回生の同期会について振り返ってみましょう。その前に、第 4 回生（昭和 8 年誕生れの人達を中心に）の特色について述べてみます。

私達は、昭和 15 年 4 月、旧制の小学校へ入学しました。翌 16 年 4 月から国民学校に変わりましたので、旧制小学校への最後の入学生になりました。昭和 20 年 8 月の敗戦を、小学 6 年生で迎え、翌 21 年 4 月、旧制の村松中学校へ入学しました。22 年 4 月に、新制中学が誕生し、私達は、村松高等学校併設中学校の 2 年生になったのですが、下級生の 1 年生が入って来ません。結局、下級生なし（私達がいつも最下級生）の状態が、中学 1 年、2 年、3 年・高校 1 年とまる 4 年間続きます。村松高校の校舎に 6 年間通学し、26 年卒業の第 3 回生のみなさんを、なんと 5 年間も、すぐ上の上級生として、崇めていたわけです。

このことは、全国共通の体験ですが、結果として、第 4 回生同士の連帯感を強め、第 3 回生に対する近親感を育ててくれました。そして後年、「かんろく会」（第 3 回生の同期会の名称）の影響を、第 4 回生の私達が受けることになります。

昭和 24 年 4 月、私達が高校 1 年生になった時、男女共学となり、あこがれのマドンナ大勢と同じ校舎ですごし、授業科目によっては、同じ教室で勉強しました。多感な青春時代の華やかな思い出の一ページです。

第 4 回生の同期会は、昭和 30 年代、40 年代には、系統



だったものではなく、男女別々に、あるいは地元で、あるいは東京で、散発的に会合していました。

昭和 50 年代の初め、村松高校同窓会東京支部会の大会に、市ヶ谷の「加茂」の会合へ出席したところ、1 年先輩である第 3 回生の同期会「かんろく会」に関して、随分、刺戟されました。「1 年おきに、男女合同で、地元幹事、東京幹事と交替制で例会を続けている。」との由。「よーし、我々もやろう。」ということになり、先ずは東京を固めよう（これは東京支部会の大会が続いていたため、まとめやすかった）。男女合同で毎年やろう。と話がまとまり、毎年例会を開催して来ました（常任幹事長の木村先生の功績大）。

昭和 50 年代の後半からは、「ふるさととは遠きにありて想うもの」と望郷の念がつのり、地元にも呼びかけて、合同でやろうと、発展し、村松・水上・湯沢・岩室・塩沢と順次開催しました。

その間、東京支部の大会にも熱心に参加を続け、2 次会を、新宿の「パイラス・クラブ」で、第 3 回生の先輩諸兄姉とご一緒するパターンが出来ています。

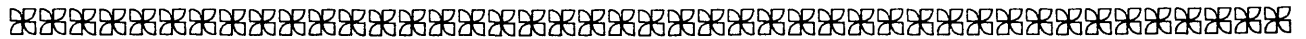
平成 5 年、昭和 8 年誕生れ組の還暦の年です。「27 年卒業生一同の環暦会を。」との企画を、地元幹事の方々が推進され、11 月 13 日、弥彦神社に参拝し武運長久を祈り、そのあと、岩室温泉高島屋で懇親会の運びとなりました。満 60 歳。卒業後 40 年余。まさに感無量でした。

村松高校同窓会の発展、東京支部大会の盛々と、私達第 4 回生の例会存続を願って止みません。



お便りの中から

- ◎ 今までに送って頂いた写真を整理しながら過ぎ去った当時の出来ごとを昨日のように思い出しております。あれは昭和63年度の支部大会でしたか、同期生に誘われるまゝに初めて参加した時、ちょっぴり不安をいだきながら会場高輪ホテルへ、まわりは皆様こわ面のお偉ら方ばかり……大変な所に来たものだと、当時の緊張した写真姿。でも一回二回と毎年回を重ねるごとに諸先輩の方との会話も多くなり大分雰囲気にもなれてきました。そしてそんな折、幹事会のお手伝いをさせて頂くようになりました。今ではふる里も代が変わりだんだん足が遠のく中で支部大会や幹事会でなつかしい方言にも接し里帰りした以上の親密なあたたかさを感じます。これも会の皆様方のおひとり一人のあたたかい思いやりのたまものと深く感謝致しております。これからは参加した方も含め一度も参加されていない方などにどんどんアピールして支部大会の楽しい雰囲気一人でも多くの方に味わって頂きたいと思っています。お陰さまでアルバムページも大分厚くなりました。本当にありがとうございました。これからも私達一同支部長さん始め皆様にまだまだ多くのお世話をおかけすると思います。何分よろしくお願い申し上げます。
(高10回 眞水 道子)
- ◎ 早々に望年会の写真ありがとうございました。佐伯支部長の役員始め同窓会の皆様へのお心くばり、改めて感謝の気持ちで敬服いたします。いろいろとお世話になるとは思いますが、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。
(高11回 田代 信雄)
- ◎ 会報送付有難うございました。支部の活動が目に見えるようです。東京支部の益々の発展をお祈り申し上げます。
(中27回 在新津市 石川 熙)
- ◎ 望年会での写真、本日頂戴しましたが、飲んだあとの私のみっともない姿に我ながら呆れたり反省したり的心境でございました。それだけ皆様のあたたかい雰囲気のにめりこませて頂いたという事でしょうか。何とも楽しい記念のひとつになりました、地域の老人会に顔を出すようになりまして急に老けが進んだような感じがいたします。
(中26回 武藤 三郎)
- ◎ 東京生活の方が長いのにみんなの顔になんとか新潟的な名残りが感じられるのが同窓生の証とでも云えるのでしょうか。写真を見て何時もながら感じております。
(高2回 篠川 恒夫)
- ◎ 写真、有難うございます。様々なポーズがあり面白く可笑しく跳めて居ります。とてもすべての事に御世話下さいまして深く感謝いたしております。
(女25回 鈴木 節子)
- ◎ 楽しかった望年会を写真を見ながら思い出しております。私共のような若い者(?)を相手に年令をはずして皆様がお話をして下さるのは、やはり同じ故郷を持っているためでしょうね。何を話しても楽しく心をホカホカとしていつも家に戻ります。
(高12回 近藤 燦子)
- ◎ カメラマンが良いのか、モデルが良いのか、いつもすばらしい写真ありがとうございます。
(女25回 佐藤 玲子)
- ◎ 暮からは毎日毎日、時間に追われる生活です。睡眠時間ももったいないような気持で、というよりは体が動かせるうちにいろいろやっておきたいというあせりにも似た気持なのかも知れませんが元気にとび廻っております。
(高8回 片柳 ムツ)
- ◎ 写真ありがとうございました。会長さん始め皆様と楽しく過ごすことを楽しみにしております。
(高12回 中島 和子)
- ◎ 立派な「臥龍が丘は緑なり」を御送付下され誠に有難うございます。役員御一同の御努力に敬意を表します。佐伯支部長の「平成六年戊午に寄せて」の名文拝読、感心いたしました次第です。村松藩の記事、興味を以って拝見、小生の家も貧乏士族でした。
(中16回 小田 怒哉)
- ◎ 何時もいつも御苦労さまです。
希望者だけでハトバスに乗りませんか。私は旅の友の会と老人クラブへも入会、まだ第一線に勤めてます。土曜は楽しいです。ジャンジャンダンスを80才のジヤ達とクタクタ。
(女24回 田村 ミツエ)
- ◎ 「臥龍が丘は緑なり」有難く拝受。ちょっとしたことから大太平洋戦争時に海軍関係の文軍本を読み続けた事もあって、斉藤朝之氏の寄稿には当時、学生であったが、何か身を引きしめる感があります。
(中27回 在亀田町 大江 雅敏)
- ◎ 支部会報新春号お送り頂きましたが、中でも長崎浩氏の歳時記風土(写真)を拝見し感無量でした。
(中26回 在新潟黒崎町 中村 市雅一郎)



- ◎ 支部会報16号、謹んで拝読。この会報に斉藤朝之氏の寄せられた“岡村逸夫君を悼む”を拝見、出征当時私の町内に居住して居り懐しく存じました。又、文中の千葉の奥畑寛幸氏は堀直昭氏の分家に当り先年岡村逸夫氏の御遺族（老母一人）を弔問されました。先年「芥川賞」を受賞した作家滝沢美恵子さんは逸夫氏の末妹で、彼女も松高出身です。

（在村松、村松郷土史研究家 佐藤 久）

- ◎ 東京支部の会報、有難うございました。なつかしい同級生の名前やら先輩後輩の写真を見て、五十年前の頃を思い出しました。いろいろ昔の事がなつかしく、よくこゝまで生きて来られたと不思議にさえ思います。それから表紙の忠犬タマ公の写真を見ました、私が最後に勤めた川内小学校に元のタマ公の銅像がありますし、その資料が保管されています。丁度十二年前に上越新幹線ができて、その記念として学校の銅像を是非新潟駅のコンコースへ設置してほしいという新潟駅から熱望されましたが、川内小出身の羽下大化先生の作で、これは先生が川内の子ども達に製作されたのだからと言って断りました。そこで町が募金して新潟駅と村松公園へ設置されたのです。像作者の林昭三先生は羽下大化先生の第一の弟子でして製作に当り川内小へも来ていただいて元のタマ公を見ていかれました。その年は新聞社やテレビ局、雑誌社など数多く取材に来られた事を思い出しました（中略）東京支部の益々の発展をお祈りします。

（中27回 在村松町 臼井 信栄）

- ◎ 亡父の詩碑の写真入りの記事が載っている“臥龍が丘は緑なり”No.15、16号をご恵送いただき誠に有り難うございました。
故郷を離れて故郷を思う気持ちは、安吾が「ふるさととは語ることなし」と、犀星が「ふるさととは遠きにありて思うもの」とうたっていますが、この会報を読むと東京に住む同窓生が故郷をしのび、母校を懐かしむ気持が伝わってきます。長い間この会を運営されるご苦労と、貴殿の人徳がしのばれます。

実はこの父の詩碑建立の火付け役となられたのは、村松旧中の同窓生で、元BSN新潟放送社長（相談役）の梁取清助氏（昭13年第23回卒）だったということを私は詩碑が完成した後で知りました。これも氏の故郷を思う気持のあらわれでしょう。

故郷を離れた人は故郷との絆を大切に考えておられるが、むしろ地元では同窓の結びつきは弱いように感じられるのは残念です。やはり「ふるさととは遠くにありて思うもの」でしょうか。益々先輩の意気盛んで、ご健勝であられること、また、東京支部の一層のご発展を祈念申し上げます。

（高11回、在新津市、長崎 高志） 佐伯支部長宛

※詩碑建立の除幕式は平成5年6月5日、当日、雨でした。 広報部より。

- ◎ 会報を楽しく読ませて頂きました。池之端のあの会場で出来事を思い出しながら — 小島さん、眞水さん等は本当に卒業以来はじめてでしたので只々懐かし顔を見合わせるばかりでした。後で、もっとお話すればよかったなあ — と私達の年代になると時間がとても大切に思えて今という時を悔いのないよう送りたいと感じます。

（高10回卒在村松 浜田 寛子）

- ◎ 広報部の皆さん、お元気ですか、御無沙汰しています。会報が届く度に、共に苦労しながら頑張っていた懐かしいあの頃が彷彿としてきます。当方は数年前、突然いろんなことが面倒臭くなって山の中に隠遁、酒も飲まず、仕事もせず、木を伐り、土を耕し、草を食い……もっぱら反省の日々？を過ごしています。

昨年夏、またもや突然思い立って、画集「夢幻風景」を発行いたしました。微かな足跡でも残したいと、私としては一世一代の大事業だったのですが、思わず涙線がゆるむような感動の手紙や、多くの人達のあたたかい心に触れることができ、決断をして良かったと思っています。支部長始め広報部の皆さん、それから村松時代の多くの友人や諸先輩方、ありがとうございました。紙面をお借りして心より御礼申し上げます。

本の宣伝を始める間もなく、絵の注文や東京の劇団から影絵の製作依頼（紀伊国屋演劇賞をうけた「壁の中の妖精」木山事務所プロデュース）を戴くなど、身辺にわかに慌ただしくなりノメシコイテル暇もなくなりました。5月には大分県湯布院町の文化・芸術運動にモデルを求めた「伊豆高原アートフェスティバル」にも参加の予定です。そんな訳で、本は山積みされたままです。今後ともお力添えの程お願い申し上げます。申し遅れましたが、前号では長岡市に於ける堀直昭公銅像建立について、佐伯支部長の簡潔で格調高い文章を掲載して頂きました。お蔭様で募金も順調に進み、秋ごろには県下で最大の銅像が完成する予定です。本当に有難うございました。

（高8回 堀 直昭）

- ◎ 拝復、お手紙、懐かしう拝読いたしました。私たちが旧制村松中学校を卒業したのは、昭和16年（1941）3月のことでしたので、まさに53年ぶりに貴兄の親かな呼びかけに接したことになります。衷心から御礼申し上げます。何よりも先ず、貴兄が元気で活躍しておられることに満幅の敬意を表します。村松中学時代の小生は、はなはだ勝手な生徒で、諸先生はもちろんのこと、同級の諸兄にとっても全く目に余る存在でした。当時の自分を思うと今もって赤面するところがあります。中学時代のことで思い出すのは、数学、英語などの教科に立派な先生がおられて親身になって指導に当っておられたことです。数学の茂野先生、英語の藤崎西、その他の諸先生からは、特別に面倒をみていただきました。番長的な存在だった小生にとっては、まこ

とに幸いなことでした。中学を終えると札幌の大学へへ行きましたが、そこでは予科、学部、の学生時代を通じて文字どおりの良師、良友に恵まれ、まずまずの成果を挙げて卒業することができました。大学卒業と同時に助手に採用され、札幌での生活を続けましたが、昭和27年4月鳥取大学農学部に移り、講師、助教授、教授を経て平成元年、名誉教授として定年退職しました。(中略)

昨年の10月下旬、叔父夫婦の33回忌の法事に出席するため久しぶりに村松を訪ねました。折よく好天に恵まれ、中学時代の通学路でもあった宝町、根木町周辺を散策しました。家並みのあちこちに昭和10年代の面影が色濃く残っていて強烈な感銘を受けて帰りました。厳しい冬の生活がなければ、村松のその後は今とはかなり違ったものとなっていたかもしれません。

(旧中26回卒 和泉 庫四郎氏より
同級の武藤 三郎氏(支部幹事)へ。

- ◎ 毎年、松高同窓会東京支部での御活躍、大変御苦労様でございます。私も東京在住の際には楽しいひとときを過ごさせていただき感謝しております一人でございます。

つきましては私の勤務しております広島のおタフクソースを同窓会の折に手土産として利用させていただけたらと勝手ながら、見本をお送りさせていただきます

した。今年10月、広島でアジア競技大会が開催されますのでオタフクも協賛企業として参加し、お好みソース、焼きそばソースを選手村で使用されることに決定しております。

不況時でもあります
が皆様に食していた
だくチャンスと思い

まして商品を特別社員価格ですので御検討の上、採用していただければ幸甚に存じます。種々商品はおいしい味、お客様に愛される価値ある商品として全国デパート、スーパーに(村松町、五泉市にも)出荷しております。よろしく願い申しあげます。松高同窓会の御発展を心よりお祈り申しあげます。

(在広島市、高3回卒、白石 キヨ)

- ※ 2月26日開催した支部幹事会で本年度支部大会記念品として採用する事と決定しております。白石さんならびオタフクソース(株)、声援くださったかんろく会の皆さんの御厚意に厚く感謝申しあげます。

(広報部)



表紙の高砂人形について

住吉神社は住吉四社大明神と称されていたが、寛文2年(1662年)藩主直吉が堀家の宗霊を同社に合祀、それ以後優遇されることとなる。当神社は元中町西側裏にあって町民より市神として崇敬されていたが、寛文2年8月26日直吉の命によって、あか山に引き移され、さらに寛文4年10月13日寺町の現在地に遷座したものである。

住吉神社の祭礼は寛文3年より始まったが寛文5年、小黑奎右衛門は祭礼に高砂人形を刻み、飾山と称する屋台をこしらえて飾ったところ、藩主の目にとまり「高砂の翁、嬭は以後の祭礼に飾るべし」とのお言葉を賜わりそれ以降の祭礼には欠かせない飾りとなった。高砂人形は再建時の脇棟梁、小黑奎右衛門(初代)の作で人形は寄せ木造りである。衣裳は完成された着物ではなく帯地反物そのものを用いて衣裳とするが、現在町民にはその技術を保存している人はいない。現在の衣裳は小黑家の分家で栃木県在住の方より立派な能衣裳が寄進され、それを着用して祭礼の社頭を飾っている。現在高砂人形は城町小黑家の土蔵に格納保管されている。

戦後しばらくの間、祭礼は社頭の高砂人形屋台そして「しゃぎり」と口説きによって盛り上げられ、参拝者を楽しませてくれたものだが、現在は人形屋台のみである。村松藩では京都の祇園囃子を取り入れ、高砂人形のしゃぎりをつくり、笛と太鼓と鉦での囃子は優雅でリズムカルなものであったが、しゃぎりを奏でる人も、口説きを

唄える人々も、現在では一人もなく、まひしい限りである。

尚、高砂人形は実は2体つくられ、1体は住吉神社へ他の1体は自宅に残されたのだが叔が「なる屋→奈良屋」へ嫁ぐ時、記念に持参せたと聞く。奈良屋は改竄藤勝時先生(旧中7回卒)の実家であるが、未亡人に問い合わせて見たが詳細についてはよくわからず、とのことであった。また小黑家の当主美代さん(旧中14回卒)は、新潟に住む娘さんのお産扱いに行かれたや間もなく病に倒れられた由、聞き取り調査を期待したや不可能になってしまった。由来のある高砂人形ではあるが、今のところ、町の文化財としての指定はされていない。

村松町観光協会では、いくつかのパンフレットを発行しているが、そのなかに「景勝と旧跡コマンの城下町村松」というのがあり、住吉神社を写真入りで次のように紹介している。やわらかな静寂の中に、悠久の歴史を秘めてたたずむ社。古くから「殿さまのお宮」として親しまれ、老松の林立する広い境内は町民の憩いの場となっている。神社をめぐる池には、色も鮮やかな大小の錦鯉がゆうゆうと泳ぎ、散策する人々、目を楽しませてくれる。例祭は7月28日と29日に行われているが、なつかしく思い出される人も多いことであろう。

寄稿 森山 宥氏 (旧中26回卒、同窓会理事、)
村松町在住 (町史調査、執筆委員)

ちょっといい話 (其の一)

昨年の同窓会本部総会の日のことでした。懇親会も終りになり参会の皆さんが帰り始めた頃、司会者のマイクを奪い取るようにした佐伯支部長“ひとこと苦情を申しあげたい”と、われるような大音声、皆、ギョッ!! “東京支部の大会では最後の手締めのシャンシャンシャン”万才三唱がおわるまでは誰一人帰る人は居ない。然るに本日、始めは60人位いた人が今ではその三分の一も居ない、どういう事か!!。皆さん、一度東京の大会を見に来ていただきたい、汽車賃だけのご負担でよい、全員御招待申しあげる。(オヤオヤ、これは大変な事になりました)ただし御祝儀はありがたく頂戴する、以上。と。(これでホッとしました)そして大きな拍手がおきました。さすが佐伯支部長、私には支部長の言おうとする胸の内に痛いようによくわかりました。

ちょっといい話 (其の二)

2月26日、今年第1回目の幹事会が湯島の新潟県人会館で開かれました。久しぶりに多くの方々にお逢い出来て嬉しい。伊藤勇五さんも村松から駆けつけられた。そして滅多に見えない広田達衛さんも居られる。話に聞けば、彼は昨年、世界でも珍しい病気を患って七ヶ月も入院していたという。私達誰も知らなかった。今日はお元気そう。あとで訊けば他の人の何倍もカラオケを歌ったという。突然芳賀さんがフラリと現われる。“芳賀ちゃん!!”と一斉に声が上がる。彼も胃を切って一年近くも入院生活を続けてました。もう逢えないかも知れないって思っていたのに。“お元気になられて”と皆が芳賀さんを取り囲む、その中に素適に髪を染めた岡本さんも、おシャレでいいネと隣の男性がつぶやく。

さて、今日の話の主題は6月4日の大会へむけての準備の打合せです。記念品、役割り、段取り等が一つ一つ決ってゆく、“今年は役員一人が新人一人以上を必ずず引っぱって来い、と支部長がハッパをかける。時には話が横にそれるが軌道修正を重ねて一応終り、懇親会に入るが、とにかく久しぶりに逢う人達なので(でもないが)話が途切れぬ。その間に幹事の一人中村雅明さんが長期に入院中と知る。急拠お見舞カンパをして、妹さんの愈佐子さんに託する。差し入れの美酒(越の寒梅など四升)を酌み交わし和気あいあいたる光景が繰り広げられる。“ヤアーすまん、すまん”と遅れて中村事務局長がおいでになる。お年の割にいつも御元気で多忙なお方だ。すかさず鶴巻、大橋両氏が盃を差し出す。併せて料理も、支部長? 支部長は何時もの如くで、“もの共、いま

そっちさ酌しにゆくからコップあけて覚悟してろ”と上気嫌でわめいていらっしゃる。そして忘れてならないのは、あの迫力ある兄貴、関さん「お久しぶりです」「アー!! あんたはオレのワルクチを書いた」と一喝、でも目は笑っている。結局、皆で二次会へ行くことになり、広田さんとも約束したのに私は、このコワイ兄貴につかまり、なんと大井町まで連行されてしまった。他の皆さんは浅草のミランへ、広田先輩、借りは次回に。お許し下さい。

ちょっといい話 (其の三)

一冊の本 (夢幻風景)

小学生の頃、今は亡き齊藤光孝先生の許で、一時期絵を習っていた事がある。そこに、堀直昭、佐藤匡秀の両氏他何人かが通って来ていた。私は一年程で辞めたが、彼等は続けていて、油絵を描き始め、私を秘かに羨ましがらせたものだ。その仲間の一人、堀さんが画集「夢幻風景」を出版された。送られてきた画集を開いて作品を目にした時、「ヤラレター!!」と思った。私も時には好きで絵を描く事もあるのだが、デザイン系の仕事が長く、感覚に甘んじて基礎を軽ろんじたツケを痛感させられた。

私達の年代は否応なしに様々な体験をさせられている。彼にも人並以上の辿った道程があり、その結果の色々な想いが、人生が、彼の絵の中に溢れている。軽ろやかに、時には静かに、でもどこか哀しい。芝居「壁の中の妖精」で使われた影絵も良かった。彼の絵が緊張の続く苦しさをもふっと柔らげてくれていた。その劇場で久しぶりにお逢いした堀さんは相変わらず飄々とした中に風格が加わり、画伯の風貌を備えていた。堀さんの絵は大勢の方々に観て、感じていただきたいものと思う。

住所 〒413-02 伊東市八幡野 1332-37

すいらん荘 6区 53

堀 直 昭

(TEL-0557-53-3178)





寄稿

日の丸 雑感

中27回 佐伯 益一

リレハンメルにおける冬季五輪の日本選手団の活躍に水をさすわけではないが、テレビの画像を見ながら、どうしても看過し得ない場面があった。それは日本人応援団の中に日の丸の国旗に黒々と文字が書かれている旗を打ち振っている場面が目に入ったからである。正に50年前の夢を見ているのではないかと錯覚したぐらいの驚きであった。地球上に250近くもの国家があり、何れも国を象徴する国旗をもっている。国旗の尊厳については今、改めて云うまでもないが、国旗が他の国から侮辱されれば大きな国際問題ともなる事は論を待たない。又、その例も少くはない。それを自らの手で汚辱し尊厳を損うとは一体どういうことなのであろうか。

私が中学入学時に所謂、日支事変がおこり太平洋戦争へと続き敗戦まで何千、何万という人が召集され戦地へと赴いていった。そして銃後を守る人達が「祝す出征、何々君のため、武運長久を祈る」と書かれ、無事生還を祈る多くの人の名が大きく小さく、ぎっしりと書きこまれた日の丸の旗を贈り、万才、万才と叫び軍歌を歌いながら駅まで送って行ったものである。

私は今ここでこれをとやかく言うものではない。私も又、何人かの友人、教師、親戚を駅頭に送った。寄せ書に名前を書いたし、又頼まれて「神兵必勝」などと書いた覚えもある。そしてそれは当時の風習であり、千人針と同様、願いや祈りをこの様な形で現わすしか方法がなかったからと思うし、日の丸を汚すというような意識も全然無かった。リレハンメルにおけるこのような場面も同様な気持であったであろうことは容易に想像できる。然し今は戦後半世紀になろうとしている。多くの国が参加しているオリンピックであり世界の人々がテレビを見ている時、私には些か思慮に欠けた行いであると思われた。

嘗つて南方から復員して来た友人から聞いた話である。兵隊で宣撫の任に付いていた時、現地の子供達に日本の歌を教えたことがあった。勿論日の丸の歌も教えた、「白地に赤く日の丸染めて」と、その時質問があった。日本の旗は美しいと思う。白は純潔、赤は情熱を現わすとも教わった、然し今、兵隊さん達の持っているどの旗を見ても、みんな白地に何やら黒く字が書いてあり殆んどまっ黒ではないか、なぜ、せっかくの綺麗な旗を汚しているのかと訊かれ、彼は返えず言葉も無かったと云う。又、いつのオリンピックの事だか忘れたが、日本選手団が故秩父宮から下賜された大日章旗を先頭に入場行進をした際、大分年月を経ていたらしく白地の部分が薄茶色

に変色していたのを見て式典係のその国の役員がとんできて、「これは失礼をした、日本の旗は白地に赤と思って用意していたが、本当は茶色だったんですね」と云われ誤導させることにホネがおれたという話も聞いた事がある。世界の国の人達はそれ程国旗に対して神経をつかうのである。まして「と等」などと書かれた日の丸が掲揚されたる世界の人達は何と想うてあろうか、誰だってイヤになるだろう。「と等」とはこの中で誓うもの、書いたり、口に出して言うものではない、と思う。

戦後今日まで国旗としての日の丸への認識がとやかく論議されているが、忌まわしい思ひ、出かあるからというのが反対する人達の大略の主張であらう。然し国旗に何の罪があろう。敗戦後、占領軍によって掲揚を禁止されていた日の丸が昭和23年ようやく解除され、青空に高く翻るのを見て心が晴れた思いがしたのを鮮明に思いおこす。話にきけば国旗は、まだ法制化されていないという。一日も早く決着をつけていただきたいものと願う。と同時に世界に冠たる日本の日の丸の旗の地位を確固不動のものとして永遠に誇りをもって保持してゆかねばならぬと思うのは敢て私一人ではあるまい。

〔追記〕

3月6日付産経新聞朝刊に、国分寺市に在住の佐藤照男氏の「五輪で感じた国旗への思ひ」と題する投書が載っていた。全く同感である。お許しを導て要約して紹介したい。

リレハンメル五輪のノルデン・ハスナー複合団体優勝は日本中を喜ばせてくれた。テレビを見ながら日の丸についていろいろと思った。

- (一) 日の丸を持つての勝利誇示は、あつてまで全力でゴールインしてから行うべきでなく、記録にもマイナスだし、他の後続選手は奮闘中でもある。
- (二) 国旗に字を書くのは、かつての出征兵士が米の價行だが、美しい日の丸を汚し国旗の尊厳を損なうものと思う。
- (三) 祝日に国旗を掲げる習慣は敗戦、一般家庭から姿を消したが、オリンピックとなると国旗を張り出す人が目立つ、見ていて気持ちは複雑である。日の丸、君が代を認めない人達はどんな気持ちで見て、るのか、日の丸といえば「街宣車」というイメージを植えつけた関係者の責任も重い。

以上

寄稿

川瀬五郎氏の思い出

亀嶋 謙

旧制村松中の大先輩（大正15年卒）、元東京赤山会会長の川瀬五郎氏が昨年12月2日未明、病のため亡くなられた。享年85才であった。

私は昭和7年に村松中学へ入った。昔の旧制中学は柔剣道が正課であり、その上、放課後のスポーツとして何か一つの部へ入ることを強制されていた。私はバスケット部（当時は籠球部と呼んだ）に入った。川瀬さんとの縁はこのときから始まる。実にもう60年も前のことだ。当時、川瀬さんは松中バスケット部の個人的なコーチのようなことをされておられた。

川瀬さんは元々は横沢家の出だが養子に入られて川瀬家を継いだ人である。実兄に野球界で有名な横沢三郎氏がいる。横沢三郎氏は初代セネターズ監督、パ・リーグ審判部長を歴任され野球殿堂入りをされたあの横沢氏の事である。

川瀬氏は昔の日本石油の大株主で資産家であった。恵まれた家で育った川瀬さんは村松中学を出ると旧制岐阜高農へ進まれ農藝化学科を優秀な成績で卒業した方で、あったが、どこへも就職されず村松へ帰り悠々の生活をされていたらしい。暇があるつて松中時代活躍されたバスケット部の後輩を指導すべく自費でコーチ役を買っておられたのである。

川瀬さんはバスケットをされた方だが、長身の方ではない。中肉中背の花車な身体つきであった。しかし如何にも良家に育ったとみられる教養を身につけた温厚な風格のある方であった。旧制中学では上級生は何事につけても怖い存在で、運動部も例外ではなかった。そんななかで川瀬さんは決して聲を荒げるようなことはなく丁寧な指導振りで、私達初年生に基礎のバスの仕方から根気よく教えてくれ、下級生の川瀬さんに対する敬愛は深いものがあつた。

残念なことに私はバスケット部にいたのは1、2年生の時だけで3年生から柔道部へかわってしまったので、川瀬さんとの縁は一旦遠ざかったが、私の川瀬さんに対するこのときの初印象は、最後のお別れをするまで鮮かに残っている。後にも触れるが、川瀬さんは戦後の10年位を環境の激変で大変な苦勞をされたのであるが、持って生まれたこの温厚篤実な気性は底光りのように内に輝き絶えなかった。川瀬さんの一生の宝物であつた。

それから歳月は10年過ぎた。昭和17年の秋頃かと思う。私は早稲田をでて松三井銀行へ入った。本店での研修を終え目黒支店へ着任した。そのとき川瀬さんに再会したのである。川瀬さんは目蒲線の洗足という高級住宅街に住んでおられ、三井銀行の目黒支店に取引をしておられた。自慢話をするようで恐縮だが、当時の三井銀行は格式高く、就中、当座小切手の取引は厳選され、三井の小切手を使用する人は世間的にも信用されていた。考えてみると川瀬家は資産家で不動産の他に当時の大会社、日本石油の大株主であったのだから充分頷ける。

私は、川瀬さんが私のような者を忘れず覚えていて下さったことが、すごく嬉しかった。

川瀬さんも喜ばれ、私を洗足の立派なお家へ招いて下さったことがあつたが、その月日は短かく私は間もなく召集され軍務についた。それからまたも10年が過ぎ去った。昭和29年頃、私は復員して三越本店の前にある三井銀行本店の審査部に勤務していた。或る日、業務部の課長が一人の顧客らしい人を私の席へ連れて来た。その人が川瀬さんであった。また再会できたのである。実に不思議な程に縁があると言わなければならない。川瀬さんは戦時中、東京から疎開され村松へ帰って生活をされたが、戦後のあの経済の激変で、さすがの川瀬さんも職なくしては生活ができず、失意のどん底から這い上がるため上京、辛うじて広告業界に職を得て暮らしをたてておられた。もうそのときは川瀬さんは40歳を幾らか越えておられたようだが人間は、余程運に恵まれた人でも、一生を順調一途に過すことは稀れである。この頃から10年間位、川瀬さんは若い頃、考えても見なかった生活の辛苦を味わい奮闘しておられた最中であつた。仕事の関係で注文を受けるため銀行の業務部へよく日参されていたらしい。そのとき不図、私のことを思いだして聞いてみたら、早速案内してくれたのだと言われた。

川瀬さんは決して鋭い商売人ではない。その人が、よりによって広告業という激しい人間集団の社会の中に揉まれておられるのは私には奇怪にも見えた。その川瀬さんが中堅の堅実な取引をしっかりと擲んで40年間という長い間、80歳を最後に勇退されるまで醜体をさらけ出すような事は微塵もなく過ごされたことは、何といっても川瀬さんの人徳、誠実さがあつてのことであると思う。

この再々会があつてから川瀬さんが亡くなられるまでの40年、私はこの大先輩に恰も影のように母校の同窓会の集まりを中心に付き添って愛顧をうけてきたのである。

戦後、日本は学制の改革で村松中学は村松高校になった。しかし旧制中学のあの5ケ年間睦んだ学校生活は格別な味があつて戦後も長い間、同窓会と言えば旧制中学の集いであつた。私はよく知らないのであるが、東京には戦前から村松中学出身者のうち村松地区出身の人が中心になった「村松会」という集りがあつたらしい。或いは、ひょっとすると「村松会」というのは昔の村松藩出身の人が加わっていたのかも知れない。その会へ川瀬さんは私を仲間に入れて下さった。もう村松出身だけでは会員が少な過ぎる状況で既に五泉出身の式場隆三郎、塚野健治氏らが参加しておられた。川瀬さんは私などからみると大先輩であるが、その会には村松中学の第一回生から第五回生位までの方が多く出席しておられた。例えば前記の他、佐藤次吉、高岡禎一郎、権平昌司、高岡忠弘、片桐孝一、高岡大輔、長野武夫、相田英三郎、成田均、杵渕政光、間 克市、近藤喜八郎らの各氏で、今は、その大半の方が故人になられたが何れも錚々たる方ばかり

りで、さすがに川瀬さんも末座で下世話をされていた。

やがてこの「村松会」は川瀬さんらの時代に入るのであるが、川瀬さん始め、水尾正二、渡辺文男、西潟新吾、目黒賢太郎、齊藤一男の諸氏等で第16回生の山村勲氏を幹事長役とし、会の名も新しく母校の裏山の赤松の山に因む「赤山会」と命名、年々盛大に長い間今日まで続いている。会長には初代、水尾さん、次は川瀬さんが継がれた。川瀬さんは会員のときも会長になられても自ら出しゃばるようなことはなされなかった。

何時も静かに笑顔をもって人に接し、総べての人に公平で差別などはしなかった。しかし、会で何か一つの案をまとめるとき幹事は必ず川瀬さんに、どうでしょうか

と訊ねる。川瀬さんがそれで良いでしょうと答えると、そこで万場一致で成立するのであった。川瀬さんという方は、そのような人徳の方で皆んなから敬愛されていたのである。全く惜しい方だが寿命とあれば諦めなければならない。いまはただ静かにご冥福を祈るだけである。合掌。

(平成6年1月末記 旧中22回卒、赤山会会長)



故 川瀬五郎氏

寄稿

翼をもがれクラーク防衛隊としてピナツボ山で 戦死した加藤政治上飛曹を悼む

齊藤 朝之(中28)

加藤政治君(中28)の消息について、昭和61年に「甲飛9期会」事務局の久保氏に照会したところ、次のことがわかりました。

戦死年月日 昭和20年4月24日

場所、状況 クラーク防衛隊(陸戦隊)に編入され、フィリピン・ルソン島のクラーク基地西方のピナツボ山ふもとで、米陸軍部隊と交戦、戦死した。

所 属 第一航空艦隊・第26航空戦隊・第211航空隊

機 種 艦上爆撃機「彗星」操縦員

また、これにより前の昭和19年6月21日にミンダナオ島ダバオ基地で、私は加藤君にばったり出会った。彼は「なんだ、お前海軍に入ったのか、馬鹿な奴だな、生きて帰れないぞ」と笑いながら、「ところで、ナチャは元気かい」と言うので、私も吹き出しながら、「ああ元気だったよ」と答えたことを懐かしく思い出します。(ナチャとは、母校前の道路をよく往来した乞食の王様のような怪人)

彼は艦爆操縦員でありながら、なぜ大空ではなく陸戦隊に編入され戦死したかを、「201空戦記」等により述べてみます。

加藤政治君は、東浦原郡三川村の出身で昭和16年10月1日、日米開戦の2か月前に海軍甲種飛行予科練生(第9期)として、剣持三男也氏(中26) 河内正勝氏(中26) 杉崎栄二氏(中27)と共に土浦航空隊に入隊した。(843名入隊、うち630名戦没)三氏は9期会、上山氏に確認済み。

加藤君は昭和18年1月26日予科教程を卒業し、136名の陸上機操縦練習生は、筑波空と百里原空で九三式練習機の操縦訓練を受け、同年11月末に飛練本科教程を終了した。さらに実用機教程として加藤君たちの艦上爆撃機組32名は、大分県の宇佐空で訓練を受けた後、昭和19年

年に入りそれぞれ実施部隊へ配属された。

加藤君は、当初26航空戦隊の第501航空隊(艦爆隊)に配属されたようである。この501空はラバウル、トラックダバオなどに転戦した後、次第に戦力を失い昭和19年7月10日付で解隊され、搭乗員は201空に編入された。

さて、201空は昭和19年10月25日、ルソン島マバラカット基地から海軍最初の神風特別攻撃隊(指揮官関行男大尉、爆装零戦1機)の発進、大空母への突入、爆沈と戦果の争ったことなる。これに陸戦隊として特攻隊を攻撃させて、

昭和20年に入り201空は、1月5日、6日と残存の零戦数十機をもって、ミンダナオ島西岸に降われた数百隻の大上陸部隊の艦船群に、特攻を行った。第1航空艦隊司令長官大西瀧治郎中將は、最後の特攻機を見送ってからルソン島で玉砕する決意を固め、クラーク基地周辺の航空隊の搭乗員、整備員、電信員など全員を基地西方のピナツボ山ふもとへ移動させることにした。

こうして山ごもりが開始されたとき、連合艦隊命令が届いた。それには「……、一戦艦隊全滅、搭乗員、一部電信員は台湾に転進すべし、実施要日は1月8日」というものであった。

1月9日早朝、マッカーサー元帥は大陸軍4個師団の兵力をもって、マバラカット北方リガエン湾の海辺に、ほとんど砲火を交えないで上陸した。

一方ピナツボ山に入った搭乗員は呼び戻され、その半数はルソン島北部のツゲガラオ基地まで、200キロ以上の陸路を歩いていくことになった。大西長官は、1月10日クラーク基地から一部の搭乗員、電信員と共に一式陸上攻撃機に乗り、台湾の高雄基地へ飛び去った。その後司令部要員、搭乗員、整備員等1千名の人員を、横須賀空と豊橋空の陸攻の応援を得て、台湾へ輸送したが、それでもツゲガラオだけで約7百名、そのほか各地に多数



の搭乗員等が取り残された。そして、救出輸送は米軍の硫黄島への攻撃が始まったため、2月中旬に中止されてしまった。

救出されず残留者となった加藤君らの搭乗員や各基地員は、クラーク防衛海軍部隊（総員1万5千名）の総指揮官杉本^{うし}衛少将（26航戦司令官、後に戦死）の指揮下に入り、ピナツボ山ふもとに陣地を構築した。

リングエン湾に上陸、南下してきた米陸軍部隊は、1月25日マバラカットを攻撃し、さらにピナツボ山麓^{さんろく}陣地に攻撃を加えてきた。米軍は2月上旬までに各飛行場を占領し、すぐに修復して戦闘機を発進させ、空と陸から海軍部隊に対し激しい攻撃を加えてきた。

クラーク地区に残された海軍部隊は約5千名、3月末までに戦闘のできる者は、千五百名に減っていた。あとは戦傷者や病人であった。指揮官は、ピナツボ山周辺の密林地帯を利用し、永久にゲリラ戦を決行することに決めた。4月下旬、バンバン川沿いに西進してきた海軍部隊は、ピナツボ山西方の草原地帯に進出した。ところが西方から肉迫してきた米陸軍部隊は、24日未明ピナツボ

山北稜線に出現し、また西方マロナット川南岸沿いに進撃してきた敵部隊も、24日ナマコ山付近に突然現れ、この東西両部隊が我が方を包囲し猛攻撃を加えてきた。西進して根拠地を定めようとしていた我が海軍部隊は、この猛攻を受け、ほとんど全滅させられた。



加藤政治君（中学4年次）

201空の整備長中村善一中佐は戦死し、基地員の大部分の者は、4月24日ピナツボ山西方のバンガー部落において、米陸軍部隊の攻撃を受け、ついに玉砕したのである。

翼をもちた加藤政治君にとっては、実に不運なことであった。加藤君に対し、あらためて心からご冥福をお祈り申し上げます。

注：一航艦長官大西中将（昭和20年5月海軍軍令部次長）は、昭和20年8月15日敗戦の翌16日未明、東京の渋谷駅に近い軍令部次長官邸で、割腹し果てた。

〔赤山会春季例会〕

桜の花の蕾が赤く脹らみはじめ、暖かく、好天に恵まれた3月26日（土）市ヶ谷、私学会館に28名のお集りを頂き赤山会例会が定刻一時に亀嶋会長の挨拶によって始まった。

佐久間幹事長より新会員の和泉庫四郎氏（中26回卒）の紹介があり、本人挨拶のあと、お酒のはいる前の会員の集合写真撮影、大先輩の渡辺文男（中12回卒）の乾杯音頭に全員が声高らかに唱和して懇親の宴は始まった。久しぶりに会えた級友達により楽しい会話が弾み、アル

コールがまわり始めた頃、小田恕哉氏（中16回卒）のユーモアのある誘いに乗り、次から次へとスピーチが飛び出す。古い良い時代を懐しむ話、部活動の苦労話、子息の語る親教師の思い出など、遂には旧先生の仇名がボンボン出てくる有様、時間の経つのも忘れ、盃を持つのも忘れている内、早や閉会予定の4時も過ぎ、全員旧校歌合唱の後、次の再会を約し、帰途についた。

（幹事 中24回卒 堀 哲二）

「故里の路標」

梁取 清助

「長崎 浩の詩碑を村松に建てたいと思っていられるってほんとですか」

新潟放送同期入社星野きよえさんにたずねられた。どこからその話が伝わっていったのか、一つのきっかけであった。

その詩に傾倒し、その人柄を慕い、教えを受けた人達、「地平の会」「掌の会」の存在を知らされて、消えていた埋火を吹きおこされたような思いがした。詩集「予兆」の「歳時記風土」に出逢い、魅せられ、共感し、以来この詩こそ、ふるさと村松に残すべきではないかと思いつけていた。

「故郷になじめず孤独で、暗い日を送り、時々呟きにも似た言葉が詩となる。それらの詩を私の路標として残しておきたいと思う」

豆本詩集「ふるさとさむく」のあとがきである。その路標は現実となり、詩碑は、ふるさとに建った。「玩具のような電車」のかたわらに、桜咲く頃の予定が6月となり、梅雨のはしりのこぬか雨の中の除幕となった。



赤山会 3. 16

この碑に毎年花が散り、雪が積って、ふるさとにひっそりと少年の日に反骨を燃やした長崎さんの詩碑の黒い顔が残った。

長崎さんの碑建立の努力をされた多くの方々に、改めてお礼申し上げます。

私の歳時記に「北狄忌」という季語が増えた。

六月の雨に披かる一つの碑

梁取清助氏（昭和13年旧中23回卒、現新潟放送、相談役）

※本文は平成5年10月発行の「地平詩集」に掲載されたもので、新津市の長崎高志氏より送られてきたものであります。広報部



村松高等学校同窓会東京支部 規 約

第一条（名 称）

この会は、新潟県立村松高等学校同窓会東京支部（以下「本支部」という）と称し、事務局を東京市に置きます。

第二条（構 成）

本支部は旧村松中学校、旧村松高等女学校、現村松高等学校卒業生並びにこれに準ずる人で東京地区に居住する者及び他府県にあって入会を希望する人をもって構成します。

第三条（目 的）

本支部は同窓会本部及び母校と連絡、提携を密にし、会員相互の親睦を図り、母校の発展に寄与することを旨とします。

第四条（事 業）

本支部は前条の目的達成のために次の事業を行ないます。

- 1 会員名簿及び会報の発行
- 2 親睦会や見学会、研修会などの開催
- 3 学校、本部との連絡、提携、行事への参加
- 4 慶弔
- 5 その他必要な事業

第五条（会 員）

本支部の会員は、正会員と賛助会員とします。正会員は第二条による構成員の内、所定の会費を納付し、本支部の目的に賛同し役員会の承認を得た人としてします。

第六条（役 員）

本支部に次の役員をおき正会員の中から選出し役員会を構成します。

- 1 支部長 一名 役員会で推薦し大会に於いて承認を得ます。
- 2 常任幹事 若干名 幹事の中から支部長が指名します。
- 3 幹事 若干名 卒業期別に選出し支部長が委嘱します。
- 4 顧問 若干名 幹事の推薦により支部長が委嘱します。

第七条（任 期）

役員の任期は二年とし、重任を妨げないものとします。

但し役員に欠員が生じた時に補充選任された人の任期は前任者の残存期間とします。

第八条（任 務）

- 1 支部長は支部を代表し会務を統括します。
- 2 常任幹事は支部長を補佐し支部長の指示により会務に参画します。
支部長に事故があった場合は常任幹事の中から支部長代行を選び支部長職を執行します。
- 3 常任幹事の中から事務局長、各部会長などを選任し本支部の運営、企画、立案、執行に当たります。
- 4 幹事は支部長の指示により会務を行ないます。
- 5 顧問は本支部に関し意見を述べ又諮問に応じます。

第九条（会 議）

本支部の会議は次のとおりです。

- 1 大 会 毎年一回開催することとし、支部長が召集します。必要に応じて臨時に開催することとします。
- 2 役員会 常任幹事会及び幹事会とし、支部長が召集します。
- 3 部 会 各部会は部会長が召集します。

第十条（会 計）

- 1 本支部の収入は次のとおりです。
 - ① 会 費
 - ② 寄付金
 - ③ その他の収入
- 2 本支部の会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日までとします。
- 3 本支部の会計収支は大会で報告し承認を得ることとします。そのために幹事の中より会計監事を二名以上選出します。

第十一条（その他）

本規約に定めていない事項については役員会に於いて協議、決定することとします。

第十一条（改 正）

本規約は平成 年 月 日より施行するものとし、改正については役員会に於いて審議し、大会で承認を得ることとします。

（細 則）

- 1 本支部の円滑なる運営、活動を図るため次の部局を設けます。各部局長は、幹事の中から若干名を役員員を選任します。

①事務局	局 長 一名	次 長 一名
②組織委員会	委員長（支部長兼任）	副委員長一名
③総務部会	部会長 一名	副部会長 一名
④広報部会	部会長 一名	副部会長 一名
⑤企画部会	部会長 一名	副部会長 一名
⑥経理部会	部会長 一名	副部会長 一名
- 2 本支部の会費は、年 3,000円とし毎年度初めに本支部からの請求により、郵便振替をもって払い込むこととします。
- 3 慶弔は常任幹事会に於いて、その都度協議決定します。

以 上

クラス会便り 其の二

◎ 高4回生クラス会

昭和21年旧制中学の最後に入学し、新制高校第4回卒となった我々は、還暦祝いを兼ねた同期会を平成5年11月13日、岩室温泉「高島屋」で出席者50名にて開催しました。

当日、午後3時に集合、全員旅館のバスで弥彦神社に参拝、還暦の御板をうけ、6時から酒宴に入り、学生時代の思い出話を花を咲かせ、二次会、三次会と深夜まで盃を交わし、翌朝、希望者は寺泊の魚市場へ、その他の者は現地にて解散しましたが、思い出となる一日でした。

(鈴木多喜男)

◎ 高7回生クラス会

平成5年11月20日、誰からともなく、久しぶりに逢いたいネ、という事になり、パッと電話して、連絡のついた人が11人、秋葉原の「ワシントンホテル」で何年目かの会合を開いた。佐伯支部長からも祝電を頂き一同感激。村松から駆けつけてくれた伊藤ユキさん、始めて参加してくれた長賀一哉さんがひときわ花を添えて下さいました。今回、連絡の取れなかった7回生の皆様にお詫びすると共に、次回からは、きちんと時間をかけて準備する事をお約束します。

(深見 洋子)



(高7回卒、クラス会)

東京大雪の日

(2月12日(土) 編集会議のこと) 広報部

起床してみると外は一面銀世界で、早暁より降りだしたという。細かな雪が絶え間なく横なぶりに降り続く。

今日は広報部の新年会を兼ねて、会報「臥龍が丘は緑なり」第17号の編集会議を等々力の江戸清でPM.3:00から開く事になっている。

午前中、深見さんから「この雪で今日やるの?」という消極的なTELあり。間髪を入れず「本日決行」と答える。雪は止むどころか空から湧くように降りしきる。

昼すぎ、佐伯支部長から「今日どうするんだ?」とTEL入り「帰りの事まで保障なしで本日決行、交通事情も良くないので早めにご出陣されたし」と回答する。

それでも雪は遠慮なくづんづん積る。

PM1:00 タイヤチェーンを賑やかに鳴らすバスに乗り込む間もなく渋滞となり、途中下車して徒歩で駅にむかう。JRに乗車、客も少なく暖房もきかずドアが開くたび雪が吹き込み頗る寒い上に雪のため超鈍行である。

私鉄に乗り換えPM.3:00前ようやく等々力駅に到着。どの方々もほぼ時間通り到着しており先ずは安堵する。

雪の中、大ご苦労さまでした。

定刻よく少し遅れて編集会議が始まり、その後は、あんこう鍋を囲んでお決まりのコースとなる。

雪も止み酒徒たち上機嫌のうちにお開きとなる。

(幹事 鶴巻 浩)

あんこうに集う友あり雪の夜

(伯)

新幹事

◎ 武藤 三郎さん(中26回卒) 5. 12. 18

◎ 松田 茂夫さん(高2回卒) 6. 4. 23

よろしくお願いたします。

◎ 第13回卒業以降の役員が極めて少数です。役員を御希望の方、又は適当と思われる方をご存知でしたら是非ご推薦下さい。お手紙で佐伯支部長か、各幹事へ

(※本年度の高校卒業生は第46回生となります。)

広報部から

◎ 会報も17冊となると見事なものです。バックナンバーが一つでも欠けていると気になります。今までに発行した会報で未だ残っているものもあります。希望される方は、号数、部数等をハガキに記載して事務局へ申し込んで下さい。足りない分はコピーの上、お送り致します。振込用紙を同封いたしますので実費を御送金下さい。(お知り合いの方にもお知らせ願います。)

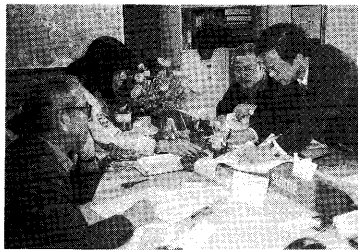
◎ 古い懐かしい写真をお持ちの方は、会報用に是非お貸し下さい。郷里の風景、学校時代の出来ごと、人物等、何でもよいです。よろしくお願いたします。(説明文つけて)

◎ 表紙に良い写真があった、と、喜こんだのもつかの間、さ

て、その謂れ、故事来歴がよく判らない。武藤幹事に調査を依頼しました。武藤さんは更に詳しく、と、在村松町の級友森山有氏に調査を依頼。森山さんは、御多忙な折にも拘らず、お手持ちの資料の他行脚の結果、調べられた資料を武藤さんに、武藤さんはそれを判り易く要約、本誌に掲載する事が出来ました。森山・武藤両氏に厚く御礼申し上げます。

経理部から

平成5年度決算の内、支部大会費が959,619円で会報第16号掲載の大会費が975,000円と報告されておりますが、この差額15,480円は大会通信費として平成4年度に支出された分を大会費実費として上乗せ加算した数字であります。



(2月19日於ツルマキ編集会議スナップ)

平成6年6月 第17号

発行人：新潟県立村松高等学校同窓会東京支部

広報部

事務局 〒108 東京都港区高輪2-1-24 榊寿内

TEL 03-3445-6501

郵便振替 東京 2-136445

校歌

旧県立村松中学校校歌

1. 塵の巷を遠ざけて
雲たちまよう白山の
麓に立てる松の群
見よ凌霄の気を含む
2. 緑色濃き木陰には
夏も尽せぬ泉あり
湧きて流れて末終に
汪洋として海に入る
3. 落葉をくぐる流れにも
巖石砕く力あり
清きは水の姿にて
強きは誰が心ぞや
4. 万緑の気地に潜み
風雪野山に荒るる時
色さえ変えぬ常盤樹の
高きは誰が操ぞや
5. それ英雄も人傑も
人の子吾等がたぐいなり
嗚呼松城の健男児
奮いて立つべし諸共に
嗚呼松城の健男子
勇みて立つべし諸共に

旧村松高等女学校校歌

1. 愛宕の山のむら松の
みどりの色の常盤なる
操を胸に日の本の
をみな徳を磨かばや
2. 心は身はも真夏なほ
日に輝ける白山の
雲にもまさる清さもて
正しき道を進まばや
3. 其の名も高きこの里の
桜の花のうらうらと
のぼる朝日に匂うごと
気高き姿保たばや

現 校 歌

- 相馬御風 作詞
中山晋平 作曲
1. 普く照らす天つ日の
光を浴びて年々に
伸びてしやまぬ若松の
ときわの志操いや高く
学徒われらの在るところ
明朗の和気みなぎれり
 2. 見よ質実に清純に
進取の生気湧き溢れ
文化の花の咲くところ
希望は常に輝ける
道に我らを進ましむ
努めなんいざもろともに

応 援 歌

(一)

1. 緑濃き臥龍ヶ丘に
轟くは我等が歓呼
若人の高なる血潮
たたえつつ春の日めぐる
2. いざ叫べ若人の誇り
わななける力の腕
見よや君歓喜の胸に
輝くは永久の勝利

(二)

1. 臥龍原頭幾星霜
切磋琢磨の功を経て
花くれないの香に匂う
誉れは高き松城の
健児が胸に血やおどる
2. 我等がえらぶますらおの
誉れは海の湧くがごと
望みは雲のゆくがごと
月の桂をなゆずりそ
栄えある名をぞとこしえに

(三)

1. 松城健児六百が
祖国の為に剛健の
大図をここに定めんと
送りいせし我が勇士
覇権をゆずることなかれ
我等六百ここにあり
2. 臥龍原頭精気あり
義憤に満ちし丈夫が
驕奢の潮せきとめて
逸情の眠り打ち破り
高うつ胸の雄叫びに
進めとなるを如何にせん
3. 今壮快の晴れ戦
見よ雄叫びの只中に
我等が望み一筋に
肩にぞかかる勇戦士
覇権をゆずることなかれ
我等六百ここにあり

三

こころざしを はたして
いつの日にか 帰らん
山はあおき ふるさと
水は清き ふるさと

三

いかにいます 父は
つつがなしや 友がき
雨に風につけても
思いいずる ふるさと

一

うさぎ追ひし かの山
小ぶなつりし かの川
夢はいまも めぐりて
忘れがたき ふるさと

ふるさと

(文部省唱歌)

作詞 高野辰之
作曲 岡野貞一

